

Title	正儀公本來の面目
Author(s)	今西,茂喜
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 60-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88813
rights	
Note	

### Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 戊子以4在..志摩國、答志嶋4賜1無位常康親王?

悲歎追慕のあまり佛道に歸依 つた年月が明示してなく、 かして、雲林院は仁明天皇から、 丙寅無品常康親王落、髮爲、僧親王者 且親王が御出家せられたのは、 せられたものであることは文徳實錄仁壽元年三月の 常康親王に賜ふたことは、 先皇第七子也母紀氏少而沉敏風情可」察 嘉祥三年三月廿一日で即ち仁明天皇崩御の翌年に 三代實錄の記事によつても明 條に 先皇諸子之中特所 t 7 て明 かで 瞭で あるが、 あ |鐘愛|親 賜

王追慕 先皇|悲歎無」已遂歸||佛理|求||冥救|也

出家の際に掬るので、 賜」此居之」の句にも 之を親王が讓受け給ふたものであると解すべきであらう ふと記されてゐる。 然るに三代實錄には雲林院は常康親王の舊居であると書きなが 或は親王が 牴觸しないであらう。 もとより常康親王の御意志に基くのである。(未完) 離宮に寓居し給 しかして離宮から精舍になつたの ዹ だたが、 か。 親王の御所有ではなかつたのを、 さすれ 5 ば 『舊居· 深草天皇即ち仁明 Ŕ 世 の句 仁 阴 天皇の ľ 天皇崩 4 天皇崩御 崩御 また 御 の後之を賜 『深草天皇 常康 の後全 <

# 正儀公本來の面目

**今** 西 茂

喜

記o元 錄o儒、 須 5 虛 々己失真。語言輕重在詞臣。まののの。 のののののののの。 劉因の讀史法を詠ずるの詩に、 心坦懷、 その行為の始終を觀り 若o 於事o そ す々求心跡。 の心情の淸汚を察し以て其真を失はざることを期せざるべからず 恐有無邊受屈人。 と楠 木正儀公の心事 の如き、 吾人は

代の活文字として定評あり、 重野安釋先生 は 義 人の投降を激賞して後北條氏の小田 且夫、 古聖既に曲」尺直」尋の權道たるを論道せり、 原固 「守を愚なりとし之を笑殺 せられた る 論 文は、 近

小陶雜錄日

南帝 南帝詔和田等伐,正儀,、故姑避害北降、 南國日蹙、 **交立、二日、** JE. IE 統天子、故屈意送」欵、正平廿四年南帝後村上崩、賴之又就,正儀,誓約三條、一曰、 平十九年賴之遣使正儀以講和議者再三不聽、葢賴之為」人忠良知,,大義、、明,,正閏之分、、南朝雖微 勸 賞陞參議、 欲""間賛"成其事」與賴之窃相會東寺而議之、 南朝公武官職如、故、 其跡似君臣默契偽降者、云 三曰、武辨所領國邑不」加,則讓,冀止干戈致太平、 無何賴之亦以,黨,正儀,被讒去職、正儀反然歸順、 k 南朝公卿猜忌目以反逆、 北朝又宣言正儀來降、於是 其意葢誠實、 讓神器於北 至此寃責氷解、 神器所 朝、兩統 E 儀 視 在

廿四年十二月和田 此說葢し正儀公及賴之の心事を洞觀して無遺憾と評すべし、 の記する所に據るも、公の面目は依然たり、 文法全然抗禮 一的にして、 正武攻正儀、 投降者に對する筆法に似す、 正儀詩 和 正武解圍去、)此邊の消息を物語るもの、 曰く、 叉南朝の、 北朝文書の辭令の 正儀公に對する態度の微溫的 (管領對面)(御所御對 0000 而して南木志及後太平記 なる は 面。 (正平

到 永德二年正月正儀重病に罹り死を待つ計りなりし時、 無其功、 **今到死、** 汝等相構對 吉野殿須拾一命於忠義之爲、 其子正勝正元を呼寄せ、(我守父遺訓雖盡 必不可覆其心、)と 忠戰、 時未

正元 果せる哉元中九年五月正元は義滿を刺さんとして捕へられ、同志十七人と共に六條磧に斬らる、 に告げて Ħ 義滿親しく

**若能改志事吾、** 則永保富貴、 生不能救王室之頹廢死有餘罪、 終不屈而

Œ. 勝 轗軻 功、 丽 カ> も後南朝の計畫に參與 Ļ 最後まで惡戰苦鬪不息、 終に十津川 1 逝く、 には現

に武

職山

上に

、儼然た

を奉じ下を御するを見るに老成の才と謂ふべし、云々) 駿臺雑話に (足利氏の臣下には唯細川賴之をこそ良將とや申すべき、 賴之先主の命を受け幼主を輔 け、 Ŀ

日人 肝亦公の好對照たり、今賴之の系譜を提ぐるに方て先づ群書類從細川家系圖によりて父賴春の行事を見るに 容易に双方話抦の一致點を見出すの効あり、 þ て成らず、 く之を許すと同 事を理解すると共に双方の位置を考慮せざる可らず、 尙 且、 北 一合同の動機に就ては、其原動力は主として之を公と賴之の兩雄に歸せざる可らず、 兩朝讒佞の輩之を妨ぐるありて然る耳、 兩 雄の父兄族人皆戰塲に尸を暴し同氣相求むるの極、 時に、 細川氏亦足利譜代の臣として北 公に在ては南朝柱石の臣、將又社稷忠烈の臣として天下の齊し 雖然、 兩雄各兩朝の樞要人物にして而 朝唯 合同之一義父子相傳之道千古無窮たり、 一の忠臣たり、 不言の間に兩々相信じ相親むの利益 兩巨將相會して時局を救は か でも其心 而して此 事 あ 兩雄 賴之の忠 合 んさし 致 ありて によ の心

方楠氏、 平四 傳天青柳乃伊止毛加志古幾那良井仁曾比久)と帝嘉賞す、曆應元年(延元三年)源顯家との對陣、貞和五年(正 建武の初朝廷大射禮を馬場殿に設けらるゝや、賴春其班にあり、 を發し乘矢皆中つ、喜び天顔 は三河 和田氏、 師 に生る、元弘役尊氏に從つて京師に至る軍功尤も多し、 直 師泰 大軍を發して來襲す、 叛するや賴春 に動く、 師軍兵守」護御所」、 衣一領を賜ひ昇殿を許さる、 事不意に出づ、 都下騷擾、 皆功蹟 あり、 五度兩矢を發し十矢皆中つ、公再び兩矢 賴春1 **尊氏恩遇特に篤し、** 此時賴春の職侍所に在り、 觀應三年(正平七年)閏二月二十日 和歌一首を献ず曰、(阿津佐弓家耳 阿波守に封 身に介せず ぜらる

馬に鞍 Ġ 大宮の畔に戰 は くせず、 此 乎、)と家臣 白袷衣を着け敵を防ぐ、 死す、時年四十九、 の 阿波に在るもの 時人呼んで曰く(人臣節に死するの大義を明 左右之士馬前に戰死するもの四人、單騎敵 町田、 筒井、 湯淺、 川端等賴春の死を聞き之に殉す、 かにし、 に當る衆寡不敵逐 其義を子孫 に遺 E 四條

以て其の操守 あり 文藻あるを見るべし、 然らば賴之の事歴や如何、

枉者、 已中、滿室蒼蠅拂難去、 賴之從之、 先謁賴之、 釼金神馬、三年庚戌發大軍攻河州拔數城、正儀不能出戰、於是歸京、留山名氏淸等、 樹公疾篤、 與氏族清氏戰讃州、清氏死四國平均、 川った 頼○日く、 同年十二月山名氏清叛寇京師、 事儉約、舉正人退佞者、選召才德者、常侍大樹左右從容導之、或諸士爭論、百姓訟獄明辨是非、 賴之敬承 山名時氏叛、 世以為良佐、(中畧)應安元年戌申四月義滿公元服、 庚曆元年己巳閏四月辭職歸南海、 二年辛 四年辛亥賴之辭職、 遣使讃州召賴之、 賴春之嫡子也、 命、十二月七日義詮公薨、時義滿公僅十歲也、賴之從遺命專政事、 起兵侵京師、 末將軍召常人、 去尋禪榻臥淸風、秋建寳冠寺于阿波、以絕海爲住持、 嘉曆元年丙寅生于三河國、 義詮公謂幼君曰、我今與爾 退休丹波、 賴之率四國兵從義詮公、 於是到京、 精兵十萬防之流血漂杵、 而爲四國之總監、 十二月義滿公召賴之、 將軍使大館氏信 出京之時祝髮號常久、 重名彌 叙從四位下任右馬頭武藏守、同六年丁未十一 父、 向小崎神崎討之復京都、時氏敗走、貞治 賴之為加冠、六月為御名代詣于石 謂 决勝於一 九 之日、 莫違其敎、 郎 再與聞 作詩曰、人世五十愧無 幼而頴敏異跡甚多矣、 以 日之中賊軍敗走、氏清伏誅、 政事、 政務又委汝、 又謂賴之曰、今與爾一子保 明德元年庚午西海亂、 七年甲寅三月義滿 任管領職、 後正 常 久以 儀詣降、 文 功 清水、 嗣 新作制條禁奢 和 花木春 子賴 四 公向 四月上洛 年乙 常久為 7年壬寅 元為管 奉 常久 月大

# 功第一云々、(續群書類從五輯上細川家系圖

尚賴之父子の文藻は前記南海行の外新後拾遺、 風雅、 新千載、 新續古今、 諸集に見ゆ、 乃其の詠草の二三を

採録せんに如左、

新後拾遺十六 雑詠上の内

賴 春 朝 臣

源

夜を深く。のこす寢覺の枕とて。また消んやらぬ。 まごの燈火。

風 雅一五 雑詠上の内 寂

しとての

叉住

かふる。

山 [里も0

**循聞き詫ぶる**。

軒の松風。

賴 春 朝 臣

源

東雲の。霞もふかき。 山の端に殘るともなき。 ありあけのつき。

新千載八

月 戀

> 賴 之 朝 臣

源

ありし夜の。 面影殘る月にさへ。 涙くもりて。 遠ざか り ね

優にやさしき武夫として推奬に値するを知るべし、 其千軍萬馬疾呼の間に在て悠揚詠歌を弄するの関日月に對しては文武の道行く所として佳ならざるなく 情哉 正儀 公の 交藻の 遺編に 徴すべき無きを。 所謂

賴之の當面の敵たると、正平七年三月男山攻圍軍に顯氏、賴之、各部將として對陣し、 湊川戰爭の細川定禪、 延元元年以後、 楠木氏對細川氏間兵馬馳騁の概要は、 正平二年九月富田林戰爭の細川顯氏あり、 各其第一線に立ちて接衝 正平四年正月五日四條繩手の せしは、 延元元年 而して同月 細 Ш 五月 计四 賴 廿五 H 0 同

日

其他 |梼に吾人に北朝軍の為めに悲痛を感せしものは、正平七年閏二月二十日正儀公の義詮に奇襲を試みたる

激戰に顯氏負傷し爲めに七月五日終に死歿するの不幸を見るに至る、

矢石の の人) (謎の人)(不思議人物)と罵るものあり、 家が公の遅 雄に如くものあらん哉、而して其期する所は、治國安民の前途と、皇室の御安座とを圖るに在り、後世の 六百年後の今日宛然之を目睹するの感あらしむ、 殊に怡安を興へて武士的情宜に厚き、又、其温籍たる態度の如何に明快にして隔意 實に雙方共に父仇として不倶戴天の敵たるにも拘はらず、賴之の公を待つ極めて懇到に、深切に、 旦握手し心鏡濶 襟を安んじ奉らんの願と、生民の塗炭を救ふの至願を以て幾度か欵を公に通じて切々の思ひを致さる、 僚中出色の意見を懷抱し南朝の天子を以て正統と崇め、三種神器の御歸座を祈念するの深き併せて南帝 兄戰歿の愁に灑ぐの淚は、專念皇室を思ふの血淚と化し、兩雄私的の悲衷は、倏忽國家的の慟哭と變じ、 楠公は四十三歳、 仇敵をも相忘れ、賴之に在ても、 て幾度乎講和 如上數度の戰陣に於て矢石の間に相見へ、其の勝敗の如きは之を天に付與し、双方能く武士的情意投合を遂 共通 賴之の父賴春を斬りたる一事にして、實に公の手兵の殊勳たりし一事たり、 想ふに應に或 間に於てするに至ては、天下之れより神聖なるはあらざる也、葢し其相知るの深くして厚き天下豈に |重さ術數多きを見て(不似父兄)(心少しく緩ひたる人)を嘲り、 に其忠實勇武に感学するの結果として、一旦握手談笑するに當つては、公に在 を謀るの努力は、 然たるに及んでは、 時 何れも所天の爲めに尸を戰塲に委したる遺兒二人が握手して茲に歡唔するの奇緣を語る等 は、父君陣亡の悲哀を物語り、又或時は、互ひに風樹の歎に沈み、 双方讒侫の徒の為めに排斥せらるゝの不幸を見るに至れり、 其父賴春、伯父清氏の死を懷はず、飜然私情を擲つて公に殉じ、 一點の私心の其靈臺に映ずる無く、元之れ私的恩怨上より之を見れば、 腐儒俗士豈能解俊傑之心事、水戸の偉人東湖先生は史上明白 嗚呼人の相知るは其心を相知るを尚 現代の史家は(不可解 無く、 ぶ 賴春は四十 寛裕にして同情あ 丽 ては、 して其相 賴之由來北 0 父兄叔 交互に父 忠實に、 九歲、 識 (疑問 朝臣 るの 大

吏

は **公の權謀固より一時耳、子孫の奮起亦固より一時耳、歸する所のものは濟世利民の一途而已、兩雄締契の骨** ど同一 13 子狡奴之れが變改を敢てし、 すを以て至當さなす、而して一朝其約を無みするに至ては决然再起義を天下に唱へ、十六年間 となす、 からず、元中亦寬正の時代と異なれり、 り、之れ所謂大丈夫の心事の公明正大、時と共に推移し、世と消長す、 渝へ茲に始めて禁裡を冐して神器を收め奉るの不祥事 (正儀叛) と書し、大日本史は赤松氏範、石塔賴房、〇〇〇 其動功や繋つて公の一家に在り、夫の茶山先生の楠公墓下作引中(前畧、尊氏之立光明帝、楠公及諸將成 視するは其意を解するに苦しむ、 四條畷の役、亦敵情を制する上に於て一死以て之に當らざるべからず、 為めに絕代の不祥事を惹起せしも、 公の臨終の遺言惻々動人の概あり、 夫れ兩朝の勢力範圍は、延元正平の 細川清氏と伍せしむ、 あり、 延元の役、素より尸を原野に暴するを以て至當 皇統連綿以て我國體を無窮に 推移消長質に時勢之をして然らし 一旦講和成り、 之れ公を以て反覆無常 時代を以て元中の時代を律すべ 而して元中の時一旦和をな 兩統更立の約を 傅 南紀の کم るの Ö 賴 一事

盡すもの、而して公の不德を責む誣妄亦極まれりと謂ふべし、 胤の主謀者たり、 賣られたりとの非難あるも、 之也、由是觀之、皇統之綿々諸將實有施此焉、則諸將不獨南朝之節臣、亦皇統之忠臣也、云々) の仇敵に降りて父兄を辱しめたりとせん乎、 くして而かも猶事の就らざるは、 せん耳、 事の成 るや、 兒正元 十津川に逝く、 盡人事待天命、 2既に刑2 而かも欺くに其道を以てす其責たる公の德の關する所にあらず、 場の 天命の時の不利に歸する耳、後世學者公の知德の不足を責め賴之の爲 其裔光正、 露と消ゆ、 兩雄相 知相援 正秀、 同族十七人犧牲と爲る、 弘和の始、 くるの結果、 雅樂之助、二郎、 國步愈艱苦、人情愈惡化の時に至つて何を苦しんで 假りに公をして一家の榮華を圖り 同明相照 正理、 見正勝終始南帝の爲め し同氣相求め、努力如此、 正親等公の遺命に従うて王事に 虚 唯晏天に號泣 Ź して南國皇 貢 配然累代 献 如 此

况乎歸 順調 没する迄渝らす子々孫々悉く節に殉して子遺無きに至る、其本謀を執り終始如一其異心無さを知るべ なる北朝を去つて殊更に衰憊せる南朝に復歸するを爲さん乎、身、 直 後平尾に於て山名氏淸と戰ひ、宗族六人家人百四十人之に殉せし史實を見るも、 行宮に歸順し直ちに參議に任じ身を 公の心術を疑ふ き也、

勿論、(從道不順君、從義不從父、人之大行也,)(荀子子道編)の信條に隨ひ含垢包羞辱身伏仁以て臣子の大 動もすれば國家の顚敗を速くの拙策に對しては、 行在に於ける公の位地たる、 亦一掬同情の涙無き能はざる也、 宛然譜代兵權を擁せる一藩鎮たり、 飽迄諫爭の勞に服して朝廷の匡救に力めざらべからざるは 故に弱小の兵を騙つて無謀の攻伐を逞うし

山陽先生評公の言に

無耻評之、

可謂不

知權

也

道に殉するの苦衷は、

の餘地なきを知らん、

正儀之降、 横寨南北之間、實存南遏北也、 南無我無戰、 北有我不敢妄南、是正儀苦心所存、後人不察妄以

す能はざる也 らしめ 十三年間單身虎狼の群に入りて畏怖の態無く、静かに大勢を觀望して群小をして毫も己を箝制せしむの隙あ 秉如失、 誠を捧げて糾!|合餘燼||苦心經營苟くも生きたり、 父正成、大運を恢廣して其業卒らず次で大亂に逢ひて臣節に死し、兄正行は繼父業遺言に從ふて死す、 **葢し謬らざるの批評と謂ふべ** 南を制するが如くにして實は北を控し、 而して賴之國に就くに及んで悠然京地を去る、是豈に道義貫心肝、 Ļ 但才學網維古今の先生にして史眼賴之との接際に言及無きは遺憾 身、北に役せらるゝが如くにして實は心、南に役せられ、 深謀遠慮時と消息 L 老成沈思天命を樂しみ、 忠義埋骨髓矣にあらずんば爲 追々 流 公全 離如

顧念し、忠誠の至心を傾けて終始渝る無し、 泰は一に繋つて自己の双肩に留めて惰容無く、 の具たらざるは無く、以是居常身を處する一毫も忽諸の態無く、心を盡す寸時等閑 **せずんばあらざる也、嗚呼公也父君陣歿の日猶襁褓に在り、二兄戰死の年漸くにして拾五才爾後三十四** として朝夕公の體驗を指示せらるゝもの 艱苦、焦心、惨怛、天下の百物皆盡く其心膽を練磨するの端たるにあらずんば則其靈臺の 家庭心理の崇高森嚴、 四圍空氣の清壯忠烈は恐くは公の代に至りて其家風彌 ゝ如く、 死を鴻毛の輕きに比すると同時に又其重き事泰山に等しきを 幾度か死生の境を出入して而も苦惱の色無く、 の跡無 增嚴 戯肅に赴 ζ, 訓育を申 父兄の靈髣髴 行宮の きた にるを信 間 'n る

侮辱を招致せざりし一 蒙らず。 の屢 由來北 同師冬の積悪 に誅せら 置くが如きは輕卒亦極矣、徒らに其外形にのみ捉へられて、內容の詮索を忽諸に付するの致す所 ずして終に(不可思議)(謎)の暗黑面に墜するに至る、 後世史家の公を評する、單に公一身の局面のみの觀察に止まりて、其心理を揣摩するに過ぎず、 生面を開きて他 々父ご戰ひ後 ゝ等は其著しきものたり。 ri 將の陰賊 義教の赤松滿祐の爲めに弑せられ。足利持仲の實兄持氏の爲めに誅せられ。 指をも染めしめざりし賴之の盛意に對しては之を感謝すると同 の怨府 面岩 直義に倚賴し終に義滿に降りて而も其死然を合せざる。 險狼 どなりて上杉顯能、 事は優に公の寛大温厚の長者、 しく なる は側 同類相害し同氣相殘ひたるの實例 面の觀察に進出するなく、 如此險惡危殆の十三年間公の怡然として聲色を動かざず賊の爲 上杉憲顯の爲めに誅殺せられ、 而も累代の怨敵と雖自然に敬意を拂ふを餘儀無くされ 水戸儒者亦此眞相を究明せずして妄斷以て叛臣。○ 含糊澁滯疑念頻出為 は 夫の尊氏の直義を鎌倉に毒 持氏の二子春王、 足利義嗣の(義滿寵子)義持の 時に公の威容儼然として めに其眞面 安 高 目を把定する 王 師 0 直 m 殺 めにす 12 同 同 胩 して更に の 1-直冬 斬首 泰

し人格の崇高なるを證して餘りあると謂はざるべからず。

ぐは、 終りに臨んで余の所編を綜括的に發表せんが爲めに、平素崇拜せる小野湖山翁の長詩を朗吟せん、 義公と湖山翁の時を同うして生れて其議論を上下せられざるを、 唯憾むら

此顯然耳。嗚呼此公當日不死之功至此顯然耳。豈有河內公之子帶刀公之弟而爲叛降之士。 含垢包羞真男兒。史乘多成賊臣手。後人誰知公心悲。君不見南北議和統則更立禮則父子。此公當日不死之功至 足收京。幾回走賊帥。風雲變化數出奇。大廈寸木能自支。乃父遺命公敢忘 乃父兵法公深知。一進一退亦何常。 人言正儀叛降穢其宗。我言此公處置出至忠。乃父乃兄相繼死。公而亦死誰折衝。三事料敵勢。一戰鼓兵氣。獨力 南技之蔭何繁盛。五十餘年護帝座。豈唯勳業冠中古。其人優爲王者佐。况復子姪臣從皆忠貞。求諸前古寡匹亞。 讀楠氏記有感偶作長句 小 野 湖 Щ

### 知し足しの一説

曾文正公曰、 知」足天地寬、貪」得宇宙隘と、故に古來聖賢君子と崇敬せらるるもの、皆足ることを知り止ま

小

沼

量

平

河。不ト過「満腹「」と是れ亦足ることを知るにあらずや、唐の張蘊古、太宗文武皇帝に大寳箴を獻じて云ふ有 まることを知るにあらずや、 ることを知る、帝堯富んで驕らず貴うして舒らず、許由の賢なるを知りて天下を許由に讓らんとす、是れ止 許由貧賤に安んじ辭して受けず、曰~「鷦鷯巢』於深林? 不」過;|一枝? 偃鼠飮」